



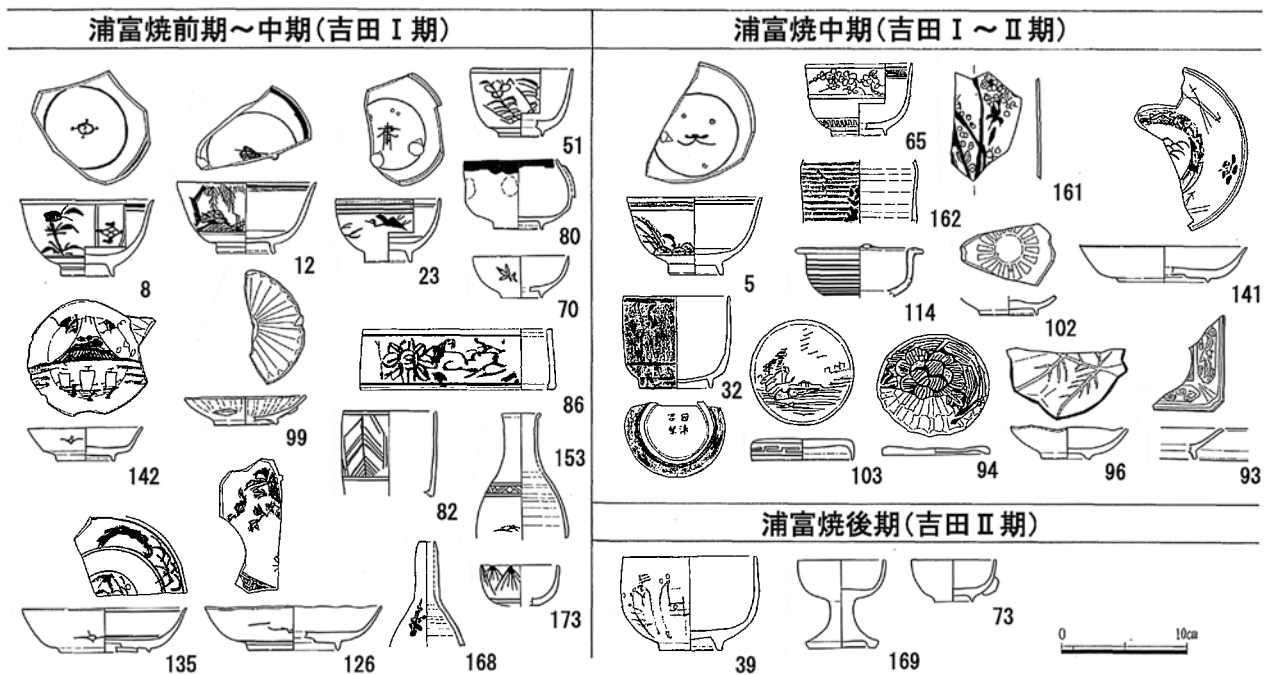
図版3 消費遺跡から出土した浜坂焼 ※は鳥取市教育福祉振興会 1999 から転載 鳥取城跡蔵の資料は鳥取市教育委員会、日下部窯跡の資料は八頭町教育委員会が所蔵



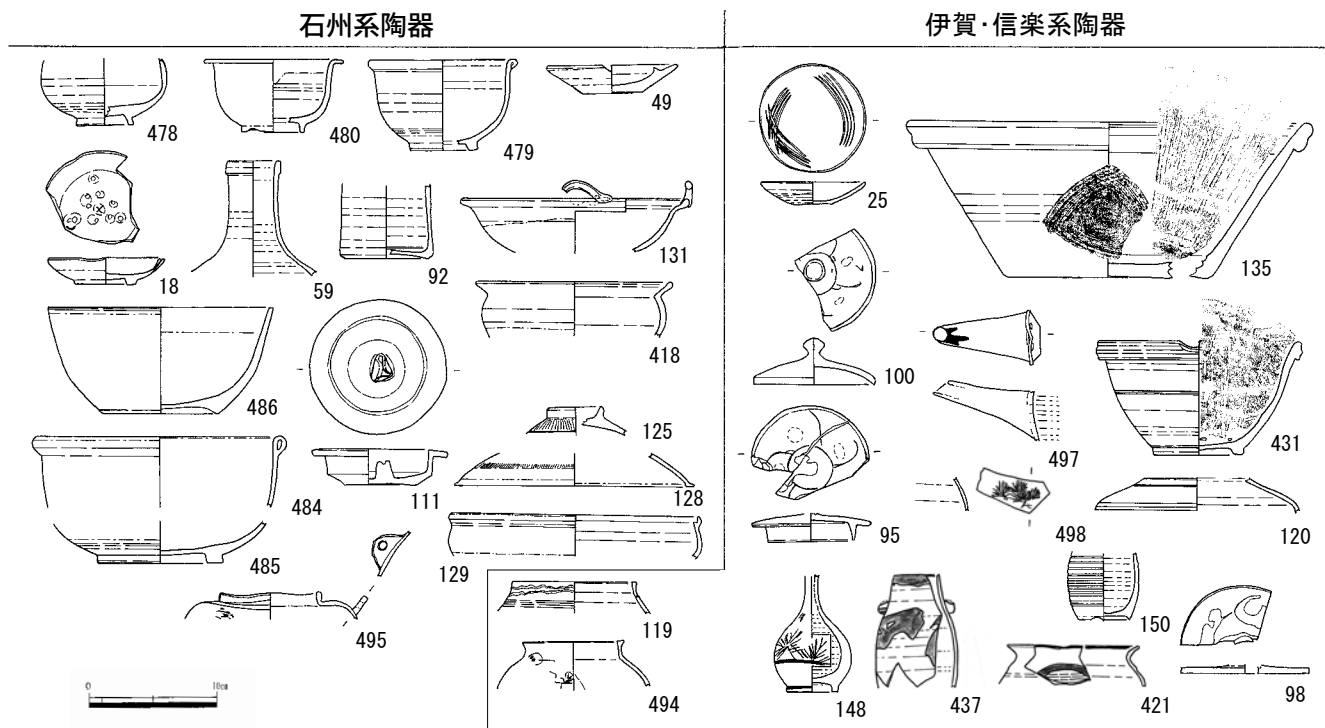
図版4 日下部窯跡出土陶器 八頭町教育委員会所蔵



図版5 浦富窯出土磁器 (鳥取陶磁器研究会 2012 から転載)



第 20 図 浦富窯出土遺物 鳥取陶磁器研究会 2012 から転載 (番号は本稿と一致しない)



第21図 ウツロ谷窯出土陶器

陶器の文様は石州系では、黄褐色の釉に白と暗褐色の釉で花などの文様を施すほか、行平には赤のラインが入る。信楽系では黄緑と茶褐色、黒褐色などの釉で風景などの絵付けを施す。

染付では笹文、山水文、鶴などの鳥や魚の文様など、出石や浦富と共通している。出石と浜坂・浦富については、鳥取で生産が開始された頃の分類は難しいものの、次第に浜坂・浦富とも各窯の個性が顕著になると考えている（鳥取陶磁器研究会 2012）。

(5) 他窯からの製品

窯体内や物原から、陶土、成形手法、釉調など異なる要素から、ウツロ谷の窯とは異なるとみられる製品が出土する。これらは工人の使用したものが、廃棄段階に投棄されたと考えられる²⁾。23の蓋は陶土の赤味が強く、内面には型成形時の布目痕を残す。482の皿は、陶土が黒く、見込付近をハケ状工具で回転させながら整える。501の行平は陶土が黒く、焼きが硬く、他の製品と大きく異なる。23の産地は不明確であるが、482・501は石州産の陶器に類似する（鳥根県教育委員会 2001）。

石州系陶器は「丸物」と呼称される瓦以外の器を中心に焼いているが、いわゆる来待釉を使う大型の壺甕類は出土していない。煮炊具である鍋類のほか、播鉢などの調理具、碗皿類や土瓶、貯蔵運搬具である徳利などが主体である。

出石系磁器は基本的には染付で、碗皿類や鉢、蕎麦

徳利や急須、仏前具など。同時期に生産していた浦富窯との共通点も認められており、磁器窯の運営は浜坂単独ではなく、浦富窯とある程度提携しているという、文献資料と矛盾していない。

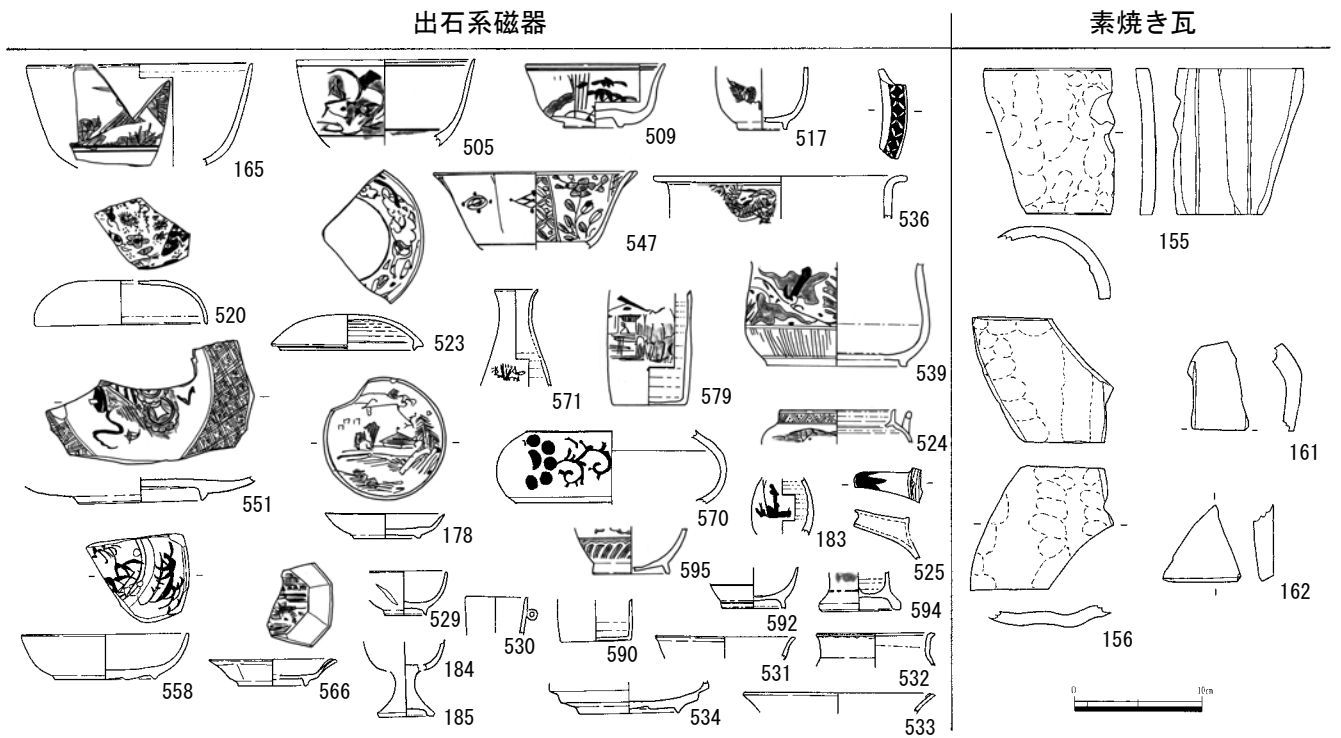
信楽系陶器は灯明皿や土瓶などが主体となる。幕末期、信楽焼自体はさほど広い流通域をもっていないが、各地の京風の焼物の需要が増加したため、工人が益子（栃木）、笠間（茨城）、洗馬（長野）、飯能（埼玉）等東日本をはじめ³⁾、浜坂（鳥取）、新・旧別所（福井）等の西日本においても展開する。

また、無釉を基調に流しがけ様の釉をもち、凹線文など回転ナデを多用するタイプを伊賀系として設定した。ただし両者の生産地が近接すること、複数の工人が想定できないため、伊賀・信楽系と一括した。

ウツロ谷窯では、複数の系統をもつ工人がともに作業していたと考えられる要素がいくつか存在する。陶器同士では石州系と伊賀・信楽系の釉の使い分けがなされず、例えば灯明皿など、初源地ではみられない器形と釉薬の不整合がある。磁器と陶器についても陶器の土瓶と同じ絵付けをもつ急須や、染付の御神酒徳利と同様の絵付けをもつ伊賀・信楽系陶器の御神酒徳利など、陶器と磁器の垣根を越え、浜坂焼として一体化した生産体制が想定できる⁴⁾。

(6) 窯道具

窯道具の焼成は陶器質が主体をなすが、磁器質、素焼きのものも含まれる。



第22図 ウツロ谷窯出土磁器・素焼き瓦 (3)

a 匣鉢蓋

円形 (186 ~ 190)

186は天井部が開口し、大型のもの。189は天井部が開かず、小型で器壁は厚い。190は花卉状を呈す。

方形 (191 ~ 194)

191の天井部は低い。192・193の天井部は高いが、192は肩が屈曲し、193は肩が丸い。

b 匣鉢身

円形 (195 ~ 231)

体部が筒形状のもの、箱形状のものがある。中位に円形の孔をもつ217や、中から小型の205 ~ 209、口縁部が水平方向に開く265がある。

ほか浜坂窯特有の匣鉢 (221 ~ 231) は、蓋と身を兼ねた形状である。窯体内から素焼きで出土した。

方形 (232 ~ 241)

平面は隅丸長方形。体部は直立し、器高には高位がある。241は口縁部が屈曲し、外に開く。

c タコハマ (242 ~ 249)

タコハマには、四足と五足がある。物原から出土した五足の249には、天井部中央に「輪違い」文が入る。

d 大型支脚 (250 ~ 275)

体部が括れるもの、棒状のもの、筒状のものなど複数のタイプがある。250は太く、ほぼ中位で括れる。251・252は抉りを入れて脚をなしている。253 ~ 258は細長で、括れが上位にある。259 ~ 273はやや高さが低いもので、中実のものと抉りを入れるものがある。

274・275は内部が中空で、体部中位に円形の孔をもつ。

e 小型支脚 (276 ~ 305)

体部中位が大きく絞られるものと、括れが上位で、台をもつものがある。陶器質のものとは磁器質のものがある。これら支脚には、大型のものは銅部中位に、小型のものは天井部に「セ」字を入れるものがある。また大型の262には「セ」字が書かれ、251・252には体部中位に「セ」字を陰刻、255は中位に「輪違い」文が陰刻される。小型のものは天井部に「セ」字を入れるものがある。

f チャツ (306 ~ 310)

器の間に置き、支えるもの。針状の突起をもつため、重ね焼きに用いられたと考える。中型のものと小型のもの、310はさらに小型である。

g 逆台形状ハマ (311 ~ 363)

断面が逆台形状を呈する。大型の311、中型の312 ~ 315、中から小型の316 ~ 318、ほか小型のものと法量は様々である。小型のものの中には下側には針を数か所貼り付けた痕跡を残すものもみられた。天井部に「セ」字の陰刻をもつものもある。磁器質が多いが陶器質のものも若干認められる。

h 円盤状ハマ (364 ~ 382)

円盤形状。針を貼り付ける場合と省略するものがある。382は窯体に釉着した状態で出土した。

i 針付ハマ (383 ~ 389・443・444)

383 ~ 385は断面長方形の輪に針の付く、当初から

針が付けられる形状。ほか 386～389 は中央に孔をもつ円盤形状で、切欠きにより針状の突起を作り出す形状である。

j その他のハマ (390～406・445～477)

390 は断面「U」字状の輪ハマ。391 は素焼きで、中央に孔をもつ円盤形状。392 は断面円形の輪ハマ。393・394 はハマか不明瞭。匣鉢底部の可能性もある。395～406、445～477 は棒状・板状のハマ。素焼きのまま使用したものと、器を安定させるために生の粘土を用いたものとある。後者には高台などの痕跡が明瞭に認められる。

k その他 (407)

407 は柱で大型である。

窯道具については周辺地域の様相が不明瞭なこともあり、詳細な検討は難しいが、道具に「セ」字と「輪違い」の文字が入るものがある。この記号が工人の違いによるものか、窯の違いによるものかは判然としませんが、陶器と磁器、陶器でも複数の系統が存在するため必要となり、使用されたと考える⁹⁾。今後各地域の窯道具の特徴が明らかになれば、工人の移動を推測する一つの要因となろう。

(7) 1号窯と2号窯

いずれも窯体内から素焼きの未製品と窯道具が出土しており、最終的に廃棄された状態であることが確認されている。したがって窯の操業開始時期、期間など明確な前後関係は明らかではない。小型品が多くみられる2号窯が若干後出する印象があるが、窯による焼分けの可能性も否定できない。

1号窯は、陶器では未成品は石見系の徳利と土瓶、伊賀・信楽系の灯明皿と土瓶、播鉢などで、出石系の未製品は出土していない。2号窯では主に石州系の徳利と伊賀・信楽系の播鉢が中心で、1号窯ではみられない小型の播鉢もある。

小型品など新しい傾向のものが多いことから窯の廃棄年代は若干2号窯が下ると予想したい。ただし、1号窯を閉じた後に2号窯を築くのも不自然であり、生産の拡大に伴い2号窯で創業したものが2号窯のみとなり、1号窯は使用可能な窯道具の出土が多いため、最終的には例えば窯道具などの置き場程度の使われ方をしたのかもしれない。

3 周辺遺跡からの出土

(1) 鳥取城 (鳥取市東町)

第20次調査(朽蔵跡)で、浜坂焼が出土した。

石州系陶器は、把手付鍋・大型徳利・片口鍋、灯明皿、行平、信楽系陶器は、土瓶、播鉢、鉢・灯明皿で

ある。染付については分類が困難なため、確定できていない。

(2) 古市遺跡 (鳥取市古市)

城下からやや南西方向に離れた千代川付近に位置する村落である。鳥取市の調査(財団法人鳥取市教育福祉振興会1999)で、伊賀・信楽と報告された土瓶類のほか、在地で生産された灯明皿などが該当する。

ここからは数点であるが焼ひずんだ染付や窯道具などが出土しており、付近に存在した吉成焼⁹⁾ 関係遺物の一部であろうと推測されている。浦富焼、出石焼、牛ノ戸焼、曳田焼、八上焼なども報告されている。

(3) 日下部窯 (八頭町・旧八東町・北山)

文久三(1863)年から十年間程操業したとされる「在方諸事控」幕末から明治にかけての陶器窯。窯と物原の調査が行われ(八東町2004)、物原から窯道具のほか多数の甕類や丸物片、瓦片、石見焼と同様の窯道具(鳥根県教育委員会2001)などが出土した。

基本的には石見系であるが、因久山焼と同じ手のものが複数あり⁷⁾、指導を受ける等、何らかの関係が指摘される。工人使用の他窯の製品として、浦富焼の染付のほか、浜坂焼の行平などが出土する。

4 周辺の窯製品との比較

次に浜坂焼とほぼ同じ時期に焼成していた他窯との相違点を検討する。

周辺地域の磁器は、浦富で焼成している。浦富焼は家老である鶴殿氏の直轄地である岩美町浦富に所在する磁器窯である。浜坂焼とともに、出石焼との関わりが強い。浦富焼の報告(岩美町教育委員会1970)では、陶石の産地を浦富周辺の「秋葉山」付近に求めており、陶石が岩美町周辺で産出されるのであれば、藩が鶴殿氏と協同で磁器生産に取り組んだと考えることは、両者の関係からも容易に推測できる。

製品の共通点は、同じ出石系の染付⁸⁾ であるため同様の意匠をもつ製品があること、浦富と同様、染付に留まらず白磁や青磁も焼成していることである。

異なる点として、ウツロ谷窯では一定量の八角鉢を焼いている、型皿、合子、五郎八、色絵、藍釉など浦富では一般的にみられるものが確認できていない。呉須は、浦富では薄い呉須で水墨画調の絵付けを施すが、浜坂では浦富より濃い呉須を用い、法量が浦富よりも一回り大きく、より出石にちかい。また、一部には浦富独特の青味がかかる釉に薄い呉須で絵付けをする特徴的なものもあるが、いわゆる出石写しの製品については、出石、浦富、浜坂の分類が困難なものも多い⁹⁾。

陶器は、同じ石州系では日下部窯が調査されている

第2表 鳥取藩（因幡）における主窯跡の動向

年代	吉成	因久山	浜坂				
1795（寛政七）年							
1809（文化六）年	鳥取藩最初の磁器窯	御手懸り					
1801～18（享和・文化）年間		信楽から陶工勘蔵が来る				国産座の門番であった亀蔵を壺焼棟梁に命ず	
1823（文政六）年							
1825（文政八）年			産物方仕方改正により御手懸廃止				
ここまで、第1次国産品振興政策期							
年代	因久山	浜坂	福井	日下部	浦富	牛ノ戸	曳田
1842（天保十三）年						初代石州江津市江津町の小林梅五郎開窯	
1850（嘉永三）年			藩の資金の交付を得て壺焼開始		開窯		村の村田甚次郎が瓦製造を開始、丸物も焼く
1852（嘉永五）年	国産座		国産座				
1854（安政元）年			税を納める			税を納める	
1855（安政二）年		開窯					
1856（安政三）年		御国座。御手懸り					
藩は在町ともに陶器に関して他国商人がやって来て売買することを禁じる							
1858（安政五）年	因幡、1858（安政五）年、伯耆に於ける他所仕入れを禁じる						
1859（安政六）年	他国品を望む者は、壺類を勝手に仕入れることを許され、壺類以外も藩内製品のみでは十分ならず、商人より員数を定めて他所仕入れを願出させる						
1861（文久元）年	御手懸りを縮小する						
1863（文久三）年			善八・藤太郎が日下部字瓦場で採土、字釜屋で瓦の焼き立てを申出る				
1864（元治元）年	御手懸り止めとなり民業へ						
ここまで、第2次国産品振興政策期							

が、この窯と比較すると、陶土が浜坂の橙色または灰色に比べ、旧八東町に位置する日下部の土は旧郡家町に位置する因久山の土と同様赤味が強い。またウツロ谷窯は全体的に上手であるが、日下部のものは比較すると器形が整わず、釉にも不純物が多い。そのため、この二窯については分類することは可能である。

もともと日下部窯は瓦を焼成しており、それが丸物の焼成に繋がったが、物原出土品を見る限り、来待釉を用いた瓦や壺甕類、緑灰や乳白色調の釉を用いた徳利や片口、行平、火鉢などを焼いている。特に壺甕類はウツロ谷窯からは出土していないため、壺甕類は別の窯か地域で焼成していたと考えられる。

因幡地域では石見系の窯は他にも旧河原町周辺の牛ノ戸・曳田があるが、この周辺の土はいずれも灰色味が強く緻密である。浜坂にも灰色味の強い土はあるものの、多孔質の土で、牛ノ戸、曳田とは異なる。

5 時期設定と周辺の概況（第7図・第2表）

(1) 浜坂窯前期：第1次国産品保護開発政策期

『総説』によると北部九州の高取との関係が指摘されている。発掘調査で窯は確認できていない。文献資料によると19世紀初頭頃である。

(2) 浜坂窯中期：第2次国産品保護開発政策期

陶器及び磁器の生産が行われる。『総説』によると陶器は出雲と、磁器は出石と関わるとある。陶土は橙

色のものと赤褐色系の2種類はある。染付は三谷氏の研究により、出石との関わりで成立したことが明らかにされている。磁器にはコバルトを使用したものが認められず、浦富と同様の白磁の存在から、浦富焼後期（吉田Ⅱ期）並行（第20図）、概ね明治はじめまでは生産は継続した可能性はある。

(3) 浜坂窯後期：民窯期

御手懸り止めから民窯に移行して後、廃絶までの間。明治18年段階での『総説』に記載されている。再興された窯に「楽焼」の記載があるが、これは伊賀・信楽系陶器を指すと考える。

御手懸りの後、民窯で三年間の操業を続けているが、この間に伊賀・信楽系陶器を焼成していたかは不明確である。窯の廃棄段階には出土遺物から石州系と伊賀・信楽系陶器が主体をなすことから、磁器生産は行われず、陶器のみの生産と考える。

(4) 周辺窯との関係（第7図）

因幡地域において現在も操業が続いているのは因久山焼、牛ノ戸焼のみで、浜坂焼・福井焼・浦富焼・曳田焼・日下部窯などはいずれも廃業した。このうち日下部窯は発掘調査が行われ、浦富焼については採集品が一定量存在するものの、曳田焼については伝世品のみで、福井焼については御手懸りでありながら、窯の位置、伝世品ともに確認されていない。ただし、近年の成果により浜坂焼をとりまく状況は僅かながらも着実

に進展している。

石見焼は、同じ日本海に位置すること、日本海ルートの中に位置しているためか、近世後期から瓦や丸物の搬入が盛んに行われた。工人も広く鳥取藩内に移住して窯を築いており、牛ノ戸焼の小林梅五郎はその代表的な人物である（平田 1979）。浜坂のほか周辺では曳田、日下部など面的な広がりをもつ。

出石系は土物（陶器）と石物（磁器）の両者が生産されているが、浜坂では鶴殿氏の浦富焼とともに磁器の技術を習得したと考えられている。磁器創業の指導をした七味屋平八（三谷 1982）は、出石焼楊子谷窯の創始者（兵庫県立歴史博物館 1998）で、出石焼諸窯との関係を検討する上で興味深い。こうした高い技術のほかにも、陶石の採掘と碎紛、呉須の調達、絵付け職人の招致など、一定規模のインフラ整備が必要なため、自ずと藩や家老などによる経営に頼らざるを得ない状況が予想できる。

伊賀・信楽系は、因久山が京焼系であり、脇窯では信楽からの工人について関わりをもつという文献資料が認められる（蘆澤 2001）。状況的にはウツロ谷窯では伊賀・信楽系の土瓶や播鉢、灯明皿など多数の焼成品が存在し、文献においても江州職人の招致を記している。ただし、窯道具の中に因久山で用いられた「輪違い」文をもつものがあることから因久山との関わりも想定でき、この点が状況を複雑にしている¹⁰⁾。

なお周辺地域においては、伊賀・信楽系はウツロ谷窯の一部や日下部窯の一部で、民窯の多くは石州系で、瓦生産が盛んに行われた。

まとめ

浜坂焼は因久山焼とともに、幕末から明治期にかけて鳥取域周辺で一定量出土する。これは藩が国産品の振興政策を行い、他国産の陶磁器の搬入を制限していたため起こった現象と考えられ、少なくとも鳥取域周辺で、他国産の陶磁器類と比べ必ずしも優品とは言いがたい浜坂焼が一定のシェアを確保していたのは、他国産を締め出す以上、陶磁器の藩内生産、とりわけ因久山焼や浜坂焼などをはじめとする、藩内の焼き物を優先的に使用する必然性が存在したのであろう。

また浜坂焼は藩の御手懸のため、私設の窯とは異なる広い範囲の技術移入が行われている。磁器では鶴殿氏の浦富窯とともに出石との強い関係が認められ、製品の中にも類似するものも少なくない。陶器では石州との繋がりが認められるほか、京焼、ここで伊賀・信楽系と呼ぶ陶器は、因幡地域の日下部窯の一部と同じ伊賀系の陶器を焼成しており、この日下部窯は信楽系

である因久山窯との繋がりが強いと予想できる。

江戸後期から幕末・明治期にかけて、各々の生産窯の特色を維持しながらも急速に広がりを見せる。その過程の中で地域の実情に応じた技術の交流がなされ、地方窯としての個性が形成されたと考える。

明治期に入り、自由競争の時代に入るとこうした地方窯の乱立から、競争による廉価、原材料の不足、窯の維持管理など様々な要因により、多くは消滅の道を辿ったと考えられる。

つまりこの時期に生産技術の伝播と交流がなされ、その後昭和の民窯への礎が形成されたものの、逆にこのことが各地域窯の個性を見えにくくし、各窯のもつ地域性への理解が容易に進まない原因を作り出したのではないだろうか。本稿の取り上げた鳥取・浜坂焼の一例が、こうした課題を解明していくための一助となれば幸いである。

おわりに

本稿は、鳥取・浜坂焼、ウツロ谷の窯跡について、発掘調査での出土品からその系譜を推測し、文献資料も併せて工人の動きや他窯の製品も含めた藩内の陶磁器生産について説明しようと試みたものである。

近世から近代にかけて鳥取東部の地方窯として成立した浜坂焼がどのような経緯を経たのかについては、窯跡から出土した製品が具体的に示している。

今回は浜坂焼を取り上げたが、すでに鶴殿氏が経営したとされる浦富焼については吉田政博氏が所蔵している採集資料を実測・検討し、報告書を刊行している（鳥取陶磁器研究会 2012）。

このように各々の窯の出土品を具体的に検討し、特定していくことで一見同じように見える焼成品についても、研究は確実に進展するのではないだろうか。

最後になりましたが、長期間にわたり資料を閲覧させていただいた鳥取県立博物館の美術と人文担当の方々、発表の機会をいただいた山陰近世考古学研究会、ならびにご助言いただいた鳥取陶磁器研究会の諸氏に篤くお礼申し上げます。

註

- 1) 八上焼については操業開始が明治期に下るためここでは除外する。
- 2) 流通品あるいは工人が直接持ち込んだものか。他窯の製品を排除するだけでなく生産地を特定することで、製品以外にも工人の由来を特定する一助になると考える。ほかに